

戦前戦後の私の青春

大 西 洋 好

中野一丁目

大本営発表「我が大日本帝国陸海軍は本日未明、米英両国と戦争状態に入れり」。ラジオのニュースが流れた日、昭和十六年十二月八日大東亜戦争の始まりである。朝学校へ行くため家族と朝食をとっていた時だった。しかし、その当時戦争がどんなものなのかピンとこなかったし、なんで米英と戦争しなければならなかったのか分からない十四歳、中学二年の時だった。ましてや自分自身が三年先に予科練に志願し、特攻隊として敵艦に当たる練習をするとは夢にも思わなかった。

私立中野中学校（現在の明大附属中野高校）三年の時、校庭で国籍不明の真っ黒い飛行機が低空で飛び去ったのを、今でもはっきりおぼえている。それが米機の偵察機であり、それが最初の日本飛来だったことがあとで分かった。その後ひんばんにB29爆撃機がくるようになった。学校も、その頃から軍事教育がきびしくなり、学習よりも教官（退役軍人）の指導のもとで軍事訓練（三八式歩兵銃を使用）が多くなってきた。

昭和十九年一月、学校より繰り上げ卒業を認めることを条件

に、御国のためにと予科練志願の要請があった。御国のためというより七つボタンにあこがれ、三月に十名位だったと思うが、三重海軍航空隊に入隊し、奈良、滋賀各分遣隊を移動した。

海軍伝統のバットで尻をなぐられたり、比叡降ろしの寒風の中、琵琶湖でカッター訓練を行ったりして、晴れて卒業した。

特攻隊の一員として九州に移り、沖繩決戦に備えた。飛行機がなくなり、今度は震洋特別攻撃隊としてモーターボートの先に爆雷を積んで、大村湾で当たる練習をしていたが、突然の命令で三重県の鳥羽に移り終戦を迎えた。その時満十八歳であった。死を何とも思わなかった自分が、終戦と聞き、急に里心がつき、今度は早く帰宅したいという思いで一杯になったことを思い出す。

鳥羽の駅より汽車に乗ったが、車窓から見えるのは焼け野原ばかりで、自分の家はどうなっているのか、また、家族は無事か、心配になってきた。中野駅を降りて啞然とした。まったくの焼け野原である。気を取り直して一目散に走った。城山公園

近くにバラックが数軒あり、その一つで無事だった父母妹の三人に出会い、抱きあってお互いの無事を喜んだことが目前にかんてくる。

特攻隊の時は何不自由なかった食物も、こちらでは何もかも配給で、食べざかりの十八歳の私は大変ひもじい思いをした。

城山公園の土地を区分けしてならし、さつまいも、きゅうり、なす等を作り飢えをしのいだ。また、満員電車にゆられて千葉の船橋まで食糧の買い出しに行き、毛布等とさつまいもを交換し飢えをしのいだ。これまで生きてこられたのも家族は勿論、近所の方々の親切心と助け合いがあればこそと深く感謝している。

